

巻頭言

百足の思考

富山一郎

2023年の初頭に直野章子さんと立木康介さんから、共同研究「家族と愛の研究会」の班長になってほしいと相談された。「無茶ぶりだ」と戸惑いながらも、「悪乗りしよう」と決めた。その悪乗りを支えたのが、鶴見俊輔や北沢恒彦たちがつくった「家の会」という存在だ。この会は、1962年1月21日、京都四条河原町の「大原女家」という甘味処ではじまり、40年も続いたという。毎月の例会と年に一度の合宿を行いながら、『家』という機関紙を刊行していた。また「家の会」の「家」とは、家族であり家制度であり家という生活空間であり家産であり、「家」という字が付くあらゆることがとりあげられたようだ。また1960年の安保闘争後の政治空間への問いが、そこにはあったと私は思っている。この「家の会」への興味と共同研究「家族と愛の研究会」が重なり、おもしろそうだとすることで班長を引き受けた。

ここでいう「おもしろい」ということの要点は、研究対象としてというより、家族や愛を語ることのおもしろさといった方がいいかもしれない。この「家の会」の40年の活動を総括的に語ることはできないが、1973年の『思想の科学』（23号）ではこの「家の会」をめぐる特集が組まれている（1981年7月にも同様の特集が組まれている）。この特集にある鼎談「「家の会」とは何か」（鶴見俊輔／北沢恒彦／笠原芳光）で鶴見俊輔は、「家の会」で語ることを次のように述べている。

無意識の習慣として続けていけば非常に強固に続くものを、百足が^{むかで}どういふふうにして歩くのかと考えたら歩けなくなった、という話があるのだけれども、そういう違和感が生じて、かえって家というものの円満な交通というものが妨げられるということがありますね。だから、われわれが無意識としてしまっておけばよいものをしまっておかないことによって、平地に波乱を起こすということが確かにあると思うのですよ。

家は、それを対象として論じる以前に、私たち一人ひとりに前提として張り付いている。ま

た鶴見はそれを「無意識の習慣」というが、この「無意識」には注釈が必要である。張り付いている家を当たり前の前提として受け入れ、意識にも上らない人もいれば、日々の日常の中で張り付く家と交渉し、あるいは我が身を引きはがそうともがいている人もいるだろう。そして私が「おもしろい」の思うのは、鶴見がいうように、家を考えることが引き起こす混乱だ。見事に歩みを続けていた百足が歩けなくなり、足がもつれ、しだいに別の歩き方を模索し始めるかもしれない。家を思考すると、「平地に波乱」が起きるのだ。それは家族と愛においても同様だ。

予定調和的結論でおわる議論やマウントの取り合いに見える研究会に飽き飽きしていた私にとって、やはりこれはおもしろいと思った。共同研究「家族と愛の研究会」のメンバー構成は、社会学、歴史学、思想史、精神分析、臨床心理、法学、文学、映画論、フェミニズム、生命倫理、批判理論をはじめ、人文学の領域の多岐にわたる。「家の会」と同様にこの研究会では、家族と愛にかかわるあらゆるテーマが議論された。またすべてではないが、「子ども」という領域が通奏低音のような問いとして底流にあったと思う。しかし研究会という場が確保したのは、こうした多様な研究分野の「学際的」研究や「総合的」研究といったよくある言葉で表現できることではない。

各々の研究テーマは多様であるが、研究会で展開されたのは、思考において「無意識の習慣」として自らに張り付いている家族や愛が引き出され、しだいに足がもつれ、別の歩き方を模索しながら、お互いが絡まりあっていくような思考だ。すなわち、百足の思考とでもいうべき営みが生まれたのである。足がもつれた百足は、容易には動き出せないだろう。この不可能性から始まる次の一步を、研究会という場が担おうとしたのである。それは、一人では思考できないことが集団では可能になるかもしれないという、予感に満ちた場だ。だから議論は終わらない。それぞれが別の歩き方を試みながら、議論はエンドレスになり、繰り出された言葉たちの豊かな感触を保ちながら、懇親会へと流れていった。

こうした毎月の研究会で議論されたことを、ここで要約するのは難しい。また結論というより議論のプロセス自体が意味を持つのだろう。ただ全体を通して浮き上がったのは、家族や愛と無関係な領域などない、ということだ。それは家族や愛が常に人という存在に張り付いているということにかかわるが、あえて付言すれば、すでに張り付いているにもかかわらず、それはある時突然、異なる相貌で顔を出す。

本研究会の計画書の冒頭には、「コロナ禍での外出自粛により、夫婦間・親子間の不和・虐待や、一人親家庭の経済的困窮があらためて浮き彫りになった」という文言が記されていた。それは、何かのきっかけで家族や愛は、問題の焦点として浮かび上がるということだ。政治的危機であろうが自然災害であろうが、大きな危機が契機になり家族や愛がイシューとして焦点になる。そのとき求められるのは、危機とイシューの分析というより、家族や愛が常に既に私

たちの存在に張り付いているということから、思考を始めることなのだ。

「主題」のこの冒頭にあるように、「コロナ禍」は、多くの困窮と見えにくい暴力を生み出した。そしてそれは終わっていない。問題は医学用語を纏って語られたことではないのだ。また「コロナ禍」をある専門分野のテーマにし、イシューとしてのみピックアップするような思考では、登場した困窮や暴力を結果的に追認することになる。そもそも「コロナ禍」という言い方自体、到来したウィルスという要因が何かを引き起こしたという定式であり、そこでの主人公はコロナである。だがはっきりしているのは、多くの困窮や暴力はコロナによる^{わざわい}禍ではないということだ。私たちはそこに、家族と愛をすえた。問題は突然生じたのではない。そしてだからこそ、自らに張り付いている家族と愛を言葉にしながら、百足の思考を歩みだしたのである。

イシューとしてくくり上げることが現状の追認に結び付くという問題は、「コロナ禍」に限ったことではない。コロナであれ災害であれ、あるいは戦争であれ、出来事に群がる研究プロジェクトを見るたびにそう思う。問われているは原因究明や明快な解説ではなく、私たち自身の思考であり、研究そのものではないのか。確かに自身に問いを立てるのは難しい。それをひとりで行うのなら、足がもつれ動けなくなるのだが、それぞれが足をもつらせながらぶつかりあい、寄りかかりあう中で、別の歩みが生まれるのだ。実に楽しい研究会の経験だった。